

デカルトの感覚知覚理論

中 島 英 司

- I. 機械論的な知覚の因果説と「志向的形象」の批判
- II. 視覚理論—光・色と位置・距離・大きさ・形の知覚
- III. 感覚知覚における精神の受動性と能動性
- IV. 感覚知覚の主観性と客観性

人間が外的世界を認識するという事態は、その事態をいささかでも理論的に捉えようとする者を驚かせる。それ自身内的な心的活動によって外的世界が認識されるということは、奥深い心性の一端を顕にしているのである。小論では、デカルトの感覚知覚の分析の跡を辿り、デカルトが先行思想との切り結びの中でどのようにこの心性に内迫し解明しているかを明らかにしたい。

I

体系期デカルトの感覚知覚理論のまとまった叙述として主に『屈折光学』をとりあげる。デカルトは『屈折光学』成立以降、感覚知覚の問題に触れる際しばしばこの著作に言及しており⁽¹⁾、終生その理論に自信をもっていたように思われる。

デカルトはこの『屈折光学』という自然学的著作において、感覚の物理学的・生理学的過程を探究し、知覚の因果説を提出している。第4講「感覚一般について」では、感覚するのは魂であって身体ではない、魂は脳に存する、諸対象が身体の外がわに惹き起す印象は神経を介して脳に存する魂に達する(VI. 109)、と云う。こうして感覚は、事物からの身体への作用を原因とし、受容器—神経—脳と因果的に伝達される「運動」の直接の結果として精神に生じると考えられる。

神経を介して脳の中に惹き起こされる「それらの運動から直接生じる多様な精神印象あるいは思惟が、感覚の知覚(sensuum perceptiones)あるいは通常我々がそう呼ぶように、感覚(sensus)と呼ばれる。」(VIII-1. 316)

このような知覚の因果説は、アリストテレス=スコラの「志向的形象」(espèces intentionnelles)の知覚説に対置されている。「志向的形象」とはスコラ哲学の術語。ジュルソンが明らかにしているように⁽²⁾、それは時の経過とともに変容を遂げ、スコラ後期には対象の性質を選び伝える物質的な基体と考えられるようになる。そして外界の事物から発しその事物に類似した「飛翔する小さな形象」(petites images voltigeantes)(VI. 85)とも考えられた。要するに「志向的形象」の知覚説は、感覚される諸性質のうちの基本的なものを「実在的性質」として自然のうちに想定する自然学に相応するものであり、事物が自らに類似した「形象」を送り出し、我々はこの「形象」の類似性によって対象を知覚するという構想である。

マルブランシュも物質的事物の観念の由来を説明する「最も一般的な見解」として、この「形象」の

理論に言及している⁽³⁾。「志向的形象」(“espèces sensibles”、“espèces impresses”とも呼ばれる)の理論はデカルトやマルブランシュの時代、一般的な知覚説であり、彼らがそれぞれの立場から理論的に格闘した先行思想であった。

デカルトは「志向的形象」の論者を批判して次のように言う。「彼らは形象について、形象はその表現している対象と類似しているはずだということしか考えていないため、いかにして形象が対象によって形成されるのか、いかにして外部感覚器官に受容されるのか、いかにして神経によって脳まで伝達されるのか、示すことができない」(VI. 112)と。すなわち、「志向的形象」の論者は、形象が対象に類似していると思こんでいる。それはとりもなおさず我々の抱く感覚が対象に類似しているという先入観に囚われているからにほかならない。「志向的形象」の形成・受容・伝達は何ら合理的に説明されえない、つまり科学的根拠がない、と批判するのである。

デカルトがこのように「志向的形象」を批判する根拠には、第一に、音や光の伝播に関する理論の確立が挙げられる。音とは耳の方へ振動してくる空気の諸部分の「運動」である(XI. 5)。それと同様に、光とは空気や透明な物体を仲立ちとして我々の眼の方へ伝わってくる非常に速く非常に鋭敏な「運動」又は「作用」である。また色の相違とは物体が光を受け取り眼の方へ送り返す仕方の相違である。従って色や光が見えるためには「運動」や「作用」以外に「志向的形象」のような「何か物質的なものが対象から眼まで到達すると前提する必要はないし、その対象の中にそれについて我々が抱く観念や感覚に類似したものが存在する必要すらないと判断できよう」(VI. 84-85)。デカルトは感覚される性質を自然に帰することなく、知性が科学的に捉える世界こそ実在的自然であると考え、科学的事実論の立場をとるのである。「志向的形象」批判の根拠として第二に、神経繊維による伝達という解剖学的知見が挙げられる。デカルトは言う。形象というものを仮に認めるとしても「対象の多様なすべての性質を魂に感覚させる手段(moyen)をどのようにして形象が与えるのか」ということだけが問題であって、「形象がそれ自身対象とどのように類似しているかということは全く問題ではないことに注意しなければならない」(VI. 113)と。つまりデカルトは「形象」という概念から「似像」とか「かたどり」とかいう意味あいを取り除く。こうして対象の多様な性質を魂に感覚させる「手段を与えるもの」いわば「信号」(signe)として「形象」を捉えるのである。この「信号」とは具体的には受容器-神経-脳と因果的に伝達される運動である。なぜなら対象からのどんな身体部分への作用も、すべて繊細な神経繊維の運動として、脳の微小部分の運動として精神に伝えられるからである。このような伝達の理論においては、対象に類似した形象というものは一般に考えられえないのである。

以上見てきたように、物体からの身体への作用という物理学的過程と、受容器から脳への伝達という生理学的過程とがともに運動や作用の因果の連鎖として説明される。このような機械論的に首尾一貫した知覚の因果説こそ「志向的形象」に対する痛烈な批判であろう。

II

次に視覚についての説明に移ろう。「感覚一般について」では、すでに見てきたように形象と対象との非類似性が強調されるが、視覚については形象が対象と或る程度類似していると考えられる。というのも、動物の眼球を摘出して行なわれる実験によって、眼底には我々の見る対象に類似している「絵」(peinture)が観察されるからである(VI. 115-117)。デカルトはこの「絵」が無数の視神

経を介して脳にまで伝達されると考える。しかしながら、視覚における形象の対象との類似性の主張は、我々がその形象の類似性によって対象を知覚するということを決して意味しない。「……その絵が我々に対象を感覚させるのは、まるでもう一つ別の眼が脳の中にあるこの眼によってその絵を知覚することができるというように、その類似性によると思ひこんではならない」(VI. 130)。つまり、「志向的形象」の知覚説の構想は、視覚においても退けられるのである。

デカルトによれば「本来視覚に属するのは光と色のみである」(VI. 130)。すなわち、視神経を介して脳の中に惹き起こされる運動から直接生じるのは光と色だけである。これに対し、対象の位置・距離・大きさ・形の知覚は脳の微小部分の運動から直接生じるものではない。対象の延長的性質の知覚は感覚の知覚とは区別されるのである。

それでは位置・距離・大きさ・形はどのようにして知覚されるのか。

最初に、位置の知覚は次のように二つの段階を経てなされる。まず、眼や頭が或る方向を向いている時、筋肉中に行き渡っている筋肉の運動に役立つ神経が脳に惹き起こす変化によって、我々は対象を見ている我々自身の姿勢を知る。次に、眼底における各々の視神経の繊維と、その起点となっている脳の部分とは対応しており、これにより眼底の一点から無際限に伸びていると想像される直線上のすべての点へと「魂は自己の注意を移すことができる」。こうしてその直線上のすべての点の位置が知覚されるのである(VI. 134-137)。

距離の知覚については、主に三つの手がかりが挙げられる。(1)対象との距離に応じてレンズの厚みと「眼全体の形が少し変わり」これに伴って脳の或る部分が変化し、魂にこの距離を知覚させる(VI. 108, 137)。眼球調節が距離知覚の手がかりになると言うのである。(2)両眼視の場合「両眼相互の関係によって距離を知る」。すなわち、対象を見る時、左右二つの視線が一点に注ぐように両眼が寄る(これは心理学では輻輳と呼ばれる)。この時、対象の一点とその像を結んでいる両眼の二点とのなす三角形において、両眼の二点を結ぶ線分の長さとその両端の二角の大きさが知られるから、一種の三角測量—いわゆる「生得の幾何学」(*Geometrie naturelle*)—によって対象との距離を知るのである。「これはごく単純な想像にすぎないにしても思惟の活動(*action de la pensée*)によるものであり……測量師がするのと全くよく似た推論(*raisonnement*)をそれ自身のうちに含まぬわけにはいかない」(VI. 138)。思惟の“ *action* ”による、と述べられていることに注目しておこう。(3)形の判明さ(*distinction*)と混乱(*confusion*)、光の強さ(*force*)と弱さ(*debilité*)から判断される。例えば或る一点を凝視している時、その点よりも遠い、或は近いところから来る光線は網膜上にそれほど正確に集まらない。そのために形がぼやける。これにより最初の点よりも遠いか近いかどちらかであるということがわかる。次いで遠いところから来る光線は弱く、近いところから来る光線は強い。こうして最初の点よりも遠いか近いか判断される(VI. 138)。

大きさは「対象との距離について抱かれる認識、或は意見を、対象が眼底に印象づける形象の大きさと比較することによって評価される(*sestimer*)のであって、形象の大きさに絶対的に依存するわけではない。」(VI. 140)

最後に、形は「対象のさまざまな部分の位置について抱かれる認識、或は意見によって判断されるのであって、眼のうちに存する絵の類似性にはよらない。」(VI. 140)

ここで大きさや形の知覚が単純に網膜像に依存するわけではないと強調されていることに注目しよう。

これは知覚の恒常性(perceptual constancy)との関係で重要な指摘である。デカルトは同じ箇所ですべての通りに言う。対象が近いところにある場合には、10倍離れている時よりも網膜像は100倍大きくなる。だからといって、その網膜像は我々に対象が100倍大きいと思わせるわけではない。少なくとも対象との距離にだまされなければほとんど同じ大きさに見える。また網膜像が我々に円や正方形を見るようにさせる時、その網膜像は通常、楕円や菱形であるにすぎない(VI.140-141)。このように透視条件の相違によって網膜像は著しく変化するが、それにも拘らず対象の大きさや形の知覚は比較的恒常的である。言いかえれば我々は対象に照応するように知覚しているのである。こうした知覚の恒常性は、視覚を直接に網膜像など近接刺激パターンに関係させては説明されえない。従って、形象の対象との類似性によって対象を知覚するという「志向的形象」の知覚説の構想は決して成功しないのである。これに対してデカルトは、対象の大きさや形は単純に網膜像に依存するのではなく、距離や位置についての認識などさまざまなデータに基づいて評価され判断される、と言うのである。

デカルトは実にさまざまな生理学的・心理学的事実を考慮しており、『屈折光学』の視覚理論は、知覚の恒常性についての言及の他にも含蓄の深い指摘に満ちている。例えばその一つは、知覚する際、頭や眼の筋肉の運動に役立つ神経が知覚の内容に関わる情報を脳に伝える、という考えである。すなわち運動神経系と知覚神経系とが密接に関連している、という指摘である。これは知覚-運動統合(perceptual-motor integration)⁽⁴⁾を示唆するものであり興味深い。

もう一つ示唆に富むと思われる考えを挙げよう。前述のように、位置の知覚の際には魂は外へと「自己の注意を移」し、また形は対象のさまざまな部分の位置についての認識から判断される、とされた。つまり対象の形を知覚する際には、精神が対象の表面の各点へ連続的に注意を移し、各点の位置についてのデータを総合している、と言うのである。このようなデカルトの考えには、言わば精神による環境世界の探索という着想に通じるものがある。デカルト自身の比喩を借りれば、ちょうど盲人が杖を用いて対象の位置や形を知覚する場合と同じように、視覚の場合も注意深い眼差しでまるで撫でるように環境世界を探索しているのだと言えよう。

以上のようにデカルトは、光や色を事物からの機械論的な作用の結果として生じる精神印象と考えたのに対し、対象の延長的性質の知覚は思惟の能動的な活動による、知性の推論や判断による⁽⁵⁾、と考え、その機制を緻密に分析しているのである。瞼を開きさえすれば、なにげなく事物が見えてくるように思われるけれども、実はそこには思惟の活発な活動が存している、そしてこれなしには対象の知覚はありえない—このことを『屈折光学』の視覚理論は明らかにしているのである。

III

さて、以上のような視覚理論は感覚知覚における精神の受動性と能動性に関して我々の反省を促す。感覚している当の事物をとくに感覚するということは我々の勝手にできることではない。デカルトが言うように、対象が感覚器官に現前していなければ感覚しようと思っても感覚しえず、逆に対象が現前するならばいやでも感覚せざるを得ない(VII.75)。感覚知覚は我々の意志に全く依存せず、外的な拘束感を伴う。この感覚知覚の不随意性・外的拘束感こそ外的世界が現実存在していることを示すものである。

デカルトにあっては、意志が精神の能動であるのに対して、知覚(感覚知覚のみならず広く観念を心

に抱くこと)は一般に精神の受動であると考えられる。では知覚・認識を精神の受動と考える理由は何か。それは、知覚・認識を「現にある知覚・認識たらしめているのはしばしば魂ではないからである。かくここで「しばしば」という語を加えているのは想像の観念のように私(魂)によって作り出されるものがあるからである一筆者。>そして魂は常に知覚・認識を、それらによって表現されている事物から受け取るからである」(XI.342)。このように精神の受動ということで、知覚の窮極的な源泉が精神ではなく知覚によって表現されている事物である、ということが意味されている。もちろん感覚知覚の場合もそれを惹き起こすのは外的事物である。「我々の外に存在する事物、すなわち我々の感覚の対象に我々が関係づける知覚は(少なくとも我々の意見が誤っていないかぎり)それらの対象によって惹き起こされる」のである(XI.346)。こうして光や色などの感覚の知覚は文字通り受動的な精神印象と考えられる。

しかしながら、すでに前節で明らかにされたように、或る事物を一定の距離をおいて一個のまとまった客観として捉える対象的知覚は精神の全くの受動であるわけではない。思惟の活発な活動によって成立するのである。『哲学原理』第2部1節では「我々は長さ・幅・深さにおいて延長している或る物質を感覚している(*sentimus*)、否むしろ感覚から刺激されつつ明晰かつ判明に知覚している(*à sensu impulsu clarè ac distinctè percipimus*)」(VIII-1, 40)と述べている。「*sentimus*」と言ってから *à sensu impulsu... percipimus*」と言い直したのは、『屈折光学』における視覚の分析から結論された感覚の知覚と延長的性質の知覚との区別を考慮したためであろう。延長的性質の知覚は感覚の知覚と同様、外的事物に規定されているが、感覚の知覚とは異なって感覚から刺激されつつ思惟の能動的な活動によって成立するのである。

以上のような対象的知覚における精神の受動性と能動性の考えは、外的事物による知覚・観念の決定が単純な機械論的決定ではなく、思惟の活動に媒介されるという思想であると言ってよいであろう⁽⁶⁾。私はこの思想が認識論上大きな意味をもっていると思う。第一に、知覚の源泉を外界の事物と考える点で、もっぱら主観の構成のみを強調する理説と一線を画す。实在論の立場をとるのである。第二に、知覚における思惟の能動的な活動を認めている点で、対象的知覚についての機械論的な決定論や単純な模写説を克服している。こうして感覚知覚がどのような主観の活動であるかを分析することに道を拓いているのである。さらに第三に、対象的知覚の成立が外的世界と主観との相互作用を前提しているということを示唆している。すなわち、外的世界に存する事物が感覚器官を介して作用を及ぼし、逆にこれに規定されつつ精神が外へと自己の注意を移して探索し、さまざまなデータを総合して判断する—こうした相互作用において始めて事物が客観としてあらわれ知覚されるのである。このような相互作用の考えは、デカルトの公式の見解である知覚表象説とは異なり、観念とそれが表現している事物とを外的に対置することができないことを明らかにしている。この点が認識論上とりわけ重要である。

知覚表象説は知覚の因果説を含んでおり概ね次のような二つの命題から成る。(i)観念は事物からの作用の結果であり、精神そのものに内属し(*menti ipsi inhaerens*)、そのみがか直接に知覚される。(ii)外的世界の事物は観念をもとに推論し判断することによって認識される⁽⁷⁾。このように定式化される認識論は、コギトと同等の直接性をもつ観念から出発して实在についての知識を根拠づけようとする形而上学に符合するものであり、デカルトに特徴的な理論である。

では『屈折光学』における感覚知覚理論と知覚表象説とはどのような関係にあるのか。そして両者は

どの点で相違するのか。まず指摘されるべきことは、『屈折光学』の感覚知覚理論から知覚表象説へと進むのは一面では極めて自然な移行であるということである。前述のように、感覚の知覚は事物からの作用の結果として生じる精神印象であり、また延長的性質の知覚は事物に規定されるとはいえ、単純に外からそのまま与えられはせず、思惟の活動によって形成されるものである。しかも知覚する際には事物からの作用はもちろんのこと、思惟の活動もその活動の対象も通常意識されない。意識されるのは精神印象であり、思惟の活動の所産たる観念である。これらのことから事物はどれも我々に直接現前せず、観念のみが直接に知覚される、と命題(i)が結論されるのである。しかしながらいったん「観念のみが直接に知覚される」と宣言されると、知覚を事物と主観との相互作用において捉える道が絶たれてしまい、『屈折光学』の理論とは異なって観念と事物との原理的な切り離しが帰結する。すなわち、本来「事物の像」(rerum imagines)たる観念は「原型」たる事物との関係においてのみ「像」であるにも拘らず、直接に知覚される内的な観念が、直接には知覚されない外的な事物に對置される。観念と事物、結果と原因、内的なものと外的なものはそれぞれ切り離されて對置される。こうして、いかに命題(ii)が強調されようとも、外的事物はデカルトの意図に反して原理的に接近不可能なものとなるように思われる。

要するに、『屈折光学』の感覚知覚理論と知覚表象説とは「観念」の捉え方が、そして「観念」と「事物」との関係の捉え方が異なるのである。『屈折光学』において「知覚」や「観念」は、オニールも指摘するように⁽⁸⁾「初めから終りまで全く説明可能な過程の最終的な所産」として考えられている。そしてその視覚理論、及び精神の受動性と能動性の考えは、対象的知覚が事物によって規定されその際主観の活動に媒介されること、すなわち対象の観念が事物と主観との相互作用において成立することを明らかにしており、このことによって観念と事物との外的對置を退けている。デカルトによる視覚の具体的分析は、単に外界の存在を前提にすることによってではなく、対象的知覚における心的活動を深く解きあかすことによって事実上二元論的制約を免れ、知覚表象説の理論的枠組を超えているのである。

IV

前節ではデカルトの感覚知覚理論の認識論上の意義に触れたが、外的世界と主観との相互作用があり観念と事物との外的對置が退けられる、ということから直ちに、我々が感覚知覚において外的世界をあるがままに認識している、ということではできない。周知のように『省察』では感覚から得た認識がまさきに懐疑に付される。日く「感覚はあまりに小さいもの、あまりに遠く離れたものに関しては時として我々を欺く」(VII. 18)と。また色・音・香・味・熱・堅さなど感覚の知覚は、物体の諸部分と対応していると認められるが、曖昧で(obscura)混乱した(confusa)知覚であり物体の本質については何も示さない、とされる。そして「感覚の知覚は本来ただ精神に……(心身の)合成体にとっていったい何が都合のよいもので何が都合の悪いものであるかを示すために自然によって与えられている」(VII. 83)と言われる。感覚の知覚は認識の領域ではなく、もっぱら生活の領域で、我々をとりまく事物の生活上の意義を示すものとしてプラグマティックに捉えられるのである。実際、感覚知覚は要素的な感覚的性質の知覚や個々の延長的性質の知覚だけに限られない。感覚知覚は生活と深く関わり、事物の生活上の意義を示し、その人の行動の鼓舞と調整に実在的な役割を果しているのである。

では、感覚知覚はどの点で主観的であり、どういう条件のもとで客観的であるのか—最後にこの問題

を考察しよう。ただしここでは「主観的」「客観的」⁽⁹⁾という語を次の二つの意味でのみ解する。(1)事物や現象の身分、及び存在する領域に関して。思惟の外に存在する事物や現象及びそれらの諸関係を「客観的」と呼び、思惟のうちのみ存在する心的活動や観念・表象を「主観的」と称する場合の意味で。(2)判断や認識の妥当性に関して。思惟の外に存在する事物や現象に照応する判断・認識を「客観的」と呼び、照応しない判断・認識を「主観的」と称する場合の意味で。

まず、感覚の知覚の主観性について。感覚の知覚が事物の生活上の意義を示すということ自体は感覚の知覚の主観性を何ら意味するものではない。すなわち我々にとっての事物の生活上の意義を示すということから、直ちに感覚の知覚が主観的であると結論することはできない。なぜなら事物が人間との関係で有する相対的に安定した機能的性質や生活上の意義は思惟の外に存する客観的なものであるからである。また、事物が感覚器官に現前する時、感覚の知覚が快の追求や苦の回避など身体の維持という目的に適った行動を呼びおこすということは、感覚がその都度事物の生活上の意義を正しく捉えているということになるからである。この点では感覚は偽よりも真をはるかにしばしば示すのである。

感覚の知覚の主観性は、それが思惟・知性のうちのみ存在し、「知性の外にはいかなる存在ももたない感覚にすぎない」(Ⅶ. 233, 440)ことに存する。すでにⅠで触れたように、感覚の知覚とその対象とは何ら類似していない。類似していないだけではない。色や音の観念は空気の微粒子の運動や神経繊維の運動と異質的でさえある。こうして光や音の伝播や神経繊維による伝達の理論は感覚の知覚とその対象との厳しい乖離を意識させるのである。さらに、これら感覚の知覚はデカルトにとって自然の諸現象を説明する要素ではありえない。例えば木の燃焼という現象において、木の中に火の「形相」とともに熱の「性質」を想定しても木の蒙る変化を何ら説明できない。火の熱も木の蒙る変化も微粒子の場所的運動によってこそ説明される(Ⅺ. 7-8)。感覚の知覚は延長や運動のような説明力をもたないのである。こうして感覚の知覚は実在的自然から締めだされ、思惟のうちにおいてのみ存在する精神印象と考えられるのである。要するに感覚の知覚は(1)の意味で客観的である事物に対応しているが、厳格に対立し乖離するものとして主観的なのである。

次に对象的知覚の主観性と客観性について。『省察』第6では「感覚が欺く」場合の例が挙げられている。日く、遠くからは円いと思われた塔が近づくとき四角であることが明らかになった、また、塔の上に据えられた大きな影像が地上から眺める時には大きなものとは思われなかった(Ⅶ. 76)と。対象の大きさや形についての判断は誤ることがあるのである。しかし感覚は常に欺くわけではない。これらの例は、我々が或る延長せる物質を「感覚から刺激されつつ明晰かつ判明に知覚している」ということ、すなわち对象的知覚が真であり、客観的妥当性を有するという立言を全面的に覆えすものではない。では对象的知覚の主観性と客観性はどのような条件に支配されているのか。『屈折光学』第6構は、知覚上の手がかりの与えられる範囲が限られていることを明らかにしている。例えば、対象が眼から4、5歩以上離れたれば眼球調節に伴う「眼の形」の変化はもはやほとんど感じられない。また「生得の幾何学」も遠く離れた対象については有効性を失う(Ⅵ. 144)。従って、遠いところに存する事物についてはその距離及び大きさ・形を推論し判断するためのデータは知性に与えられておらず、それらを知覚することはできないはずである。しかるに『省察』第4の判断論・誤謬論が明らかにしているように、我々はしばしば知性の理解しないものにまで意志の同意を及ぼしてしまう。このような「無思慮に判断する或る習慣」(Ⅶ. 82)から、その事物の大きさや形が網膜像に基づいて一大きさや形の知覚は網膜

像に直接依存しないにも拘らず一判断されてしまう。このことから容易に誤謬が生じるのである。だから「感覚が欺く」とは言っても、それは実は意志の濫用から生じる誤謬なのである⁽⁵⁾。裏返して言えば、知覚上の手がかりが与えられるかぎり対象的知覚は明晰かつ判明であり客観的であると考えられる。要するに、対象的知覚の主観性と客観性は(2)の意味において考えられる。そして或る判断・知覚が客観的であるか否かは、一つには知覚上の手がかりが与えられるか否かに、もう一つには意志の同意を、知性が明晰かつ判明に理解するものだけに制限するか否かに依存している。これらの条件を無視して網膜像が直接に事物に帰せしめられる時、その判断は主観的となり誤謬が生じるのである。

注目されることは、思惟の能動的な活動によって形成される対象的知覚が、心的活動に大いに依存していることを理由に主観的であるとは考えられていないことである。つまり外的世界がそれによって認識される主観的活動と、その所産の客観性とが正當に区別されていることである。およそ外的世界の認識が人間による認識であるかぎり思惟の活動に媒介される。従って思惟の活動の媒介を理由に或る認識を主観的と呼ぶならば全ての認識が主観的であるということになろう。問題は形成される知覚・認識と客観的事物との照応関係である。そしてデカルトは、事物に規定されつつ精神が自ら探索し、さまざまな手がかりに基づいて推論し判断して、好条件のもとでは客観的事物に照応する知覚を成立させる、と考える。そうした思惟の力を承認するのである。上述のことから、デカルトにとって知覚的世界は、延長的性質の知覚にかぎり一定の範囲内で物理的世界に一致している、と結論して差し支えないであろう。

(注)

テキストは *OEuvres de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery*. を用いた。デカルトからの引用はその巻数をローマ数字でページ数をアラビア数字で示した。

(1) 『省察』第6答弁(Ⅶ. 437, 438)。『哲学原理』第4部189節, 195節(Ⅷ-1. 316, 319)。『覚書』(Ⅷ-2. 359)。『情念論』第1部12節, 13節(XI. 337, 338)。なお『人間論』(1632~3年頃執筆)においても『屈折光学』がすでに完成しているものとして言及されている(XI. 153, 156)。

(2) E. Gilson; *Etudes sur le rôle de la pensée médiévale dans la formation du système cartésien*. pp. 24 - 25.

(3) *De la recherche de la Vérité*. Livre III. II^e Partie. Chapitre II.

(4) 感覚受容器の受けとった情報を中枢に伝達する知覚神経系と、中枢の指令を効果器に送る運動神経系との連関を心理学では知覚-運動統合と言う。位置・方向の恒常性はこの知覚-運動統合によるものである。

(5) 『省察』第6答弁では感覚を三段階に区分している。(i)外的対象によって感触されるために生じる脳の特有の運動。(ii)この脳の運動から直接に精神のうちに生じる色や音などの感覚。(iii)脳の運動を機会として行なわれる判断や推論。延長的性質の知覚は(iii)の段階に属し、通常感覚に関係づけられるけれども実際には「ただ知性だけに依存している」、また(i)と(ii)の段階には「何らの誤謬もありえない」と言われる(Ⅶ. 436-439)。

なお、小論で「感覚知覚」と言う場合には、(ii)の段階の感覚、或は感覚の知覚と、(iii)の段階の延長的性質の知覚すなわち対象的知覚との両者を含めて考えている。

- (6) 「あらゆる作用は相互作用であり、外部的原因は内部条件を通して働きかける」という弁証法的唯物論の決定論を、人間の認識活動に拡張したルビンスシュテインの理論から大きな示唆を受けた。「客体が認識活動の結果を決定するのは、直通的でなく、無媒介的でなく、機械的でもなくて、客観的合法則性に従う脳の反射活動、人間の分析的・総合的認識活動を介して、媒介的に決定するのである」(内藤・木村訳『心理学』上 p.34)。また、寺沢訳『存在と意識』からも多くの点で啓発された。
- (7) 知覚表象説の考えは、『省察』第2答弁「諸根拠」の公理V(VII. 165)、ジビューフ宛書簡、1642年1月19日(III. 472-480)などに端的に表明されている。
- (8) Brian E. O'Neil; Epistemological direct realism in Descartes' philosophy. p.57.
- (9) デカルトにおいて“sujet, subjectum”は「属性・性質を担う基体」のことであり、また“objectif, objectivus”は「観念によって表現されているかぎりでの」という意味である。今日用いられる「主観」及び「客観的」という語とは意味が異なるのである。

追記

小論は修士論文『デカルトにおける外界認識の問題』第1節に補筆修正したものである。

[哲学 博士課程3回生]

Summary (欧文要旨)

La théorie cartésienne de la perception

par Eiji Nakashima

Nous traitons, dans cet article, des problèmes de la perception chez Descartes, spécialement de celle qui se produit par l'entremise des sens. Il s'agit des points suivants: 1°, comment Descartes fait-il l'analyse de la perception en critiquant les idées des penseurs précédents? ; 2°, quelle est la signification épistémologique de la théorie cartésienne de la perception?

Concernant d'abord les sens en général, Descartes présente, dans la *Dioptrique*, la théorie causale et mécanique de la perception, en rejetant la doctrine des espèces intentionnelles: d'après lui nos sentiments viennent immédiatement des mouvements qui sont excités par l'objet dans le cerveau. Ensuite il divise, en ce qui concerne la vision, toutes les qualités en deux catégories: 1°, la lumière et la couleur qui seules appartiennent proprement au sens visuel; 2°, la situation, la distance, la grandeur et la figure de l'objet qui ne s'aperçoivent que par l'aide de la pensée: le jugement, le raisonnement et l'investigation du monde extérieur par l'âme.

Certes on ne peut pas nier que la perception de l'objet ne soit déterminée par cet objet lui-même, mais il ne faut pas oublier qu'elle se forme «par une action de la pensée». Ce que Descartes met en lumière, c'est que cette détermination de la perception par l'objet n'est ni immédiate ni mécanique: elle est faite par la médiation de l'action du sujet. La signification épistémologique de cette théorie consiste à considérer la perception comme produit des actions réciproques entre le sujet et le monde extérieur, et à éliminer l'opposition absolue de l'idée et de l'objet qu'elle représente.

Enfin, les couleurs, les odeurs et les autres qualités semblables sont certainement subjectives en tant que sentiments qui n'ont aucune existence hors de la pensée. Mais la perception de l'objet engendrée par l'action de la pensée est claire et distincte, c'est-à-dire adéquate à l'objet, dans la mesure où les conditions nécessaires n'y manquent pas. De là nous pourrions conclure que pour Descartes le monde perçu, si l'on considère seulement celui des qualités spatiales, coïncide dans une certaine mesure avec le monde physique.